



TITLE:

社會理念とイデオロギー，ウトピー及びミートス(一)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 社會理念とイデオロギー，ウトピー及びミートス(一). 經濟論叢 1932, 34(4): 643-667

ISSUE DATE:

1932-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130170>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第

卷四十三第

行發日一月四年七和昭

論 叢

動的資本と課税

法學博士 神戸 正雄

社會理念とイデオロギイ及びミースト

文學博士 米田 庄太郎

マルクスに於ける精神科學的方法

經濟學博士 石川 興二

時 論

上海事變を通じて見たる日支關係

經濟學博士 作田 莊一

研 究

大量觀察に於ける理論と技術

經濟學士 蜷川 虎三

國勢調査の性質に就て

經濟學士 岡崎 文規

燒津鯉漁業に於ける船仲組織

經濟學士 岡本 清造

アルフレッドの工業集積理論について

經濟學士 菊田 太郎

說 苑

經濟學と經營學との境界線に就て

經濟學士 谷口 吉彦

東海道濱松宿に於ける人馬遣ひ方について

經濟學士 大山 敷太郎

デイーチエルの公債論

經濟學士 鹽見 眞澄

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

社會理念とイデオロギー、ウトピー及びミートス (二)

米田 庄太郎

一、緒言

二、イデオロギーとウトピー問題ノ論争

三、イデオロギー概念の由來

四、マルクス及びエンゲルスのイデオロギー論

(以上本號掲載)

五、マンハイムのイデオロギー概念論

六、マンハイムのウトピー的意識論

七、ソレルのミートス論

八、社會理念

一、緒言

私は本雜誌本年二月號に公にせる論文「人間學的社會哲學」の第三節中に述べし如く、社會哲學の根本的任務は先づ社會理念を確立することにして、そうして特に現代人の社會哲學に於ては、其の社會理念は「自由に生きんとする人間の共同生活團體」として公式化さる可きものと考へるのであるが、然るにヤハリ同節中に述べし如く、今日の學界の狀況に於ては、かかる社會理念の公式化に對して直ちに起る問題は、自由に生きんとする人間が果して共同生活團體を構成し得るか否かと云ふ存在的可能性問題である。併し學問論的に嚴密に考へると、尙ほ夫れに先だちて論究すべき一問題がある。夫れは即ち社會理念一般の論理的本質問題である。そうして私はヤハリ今日の

學界の狀況に於ては、此の問題を社會理念とイデオロギー、ウトビー及びミートスとの關係を論究することによりて、最とも適切に取扱ふことが出來ると考へ、かくて先づ其等三者の夫れ夫れの概念を考究し、次に其等三者の關係、終りに其等三者と私の云ふ社會理念との關係を論究して、以て私の云ふ社會理念の論理的本質を究明したいと思ふ。

二、イデオロギーとウトビー問題の論争

私の見る處によれば、今日社會哲學上の根本的一問題として大に重要視す可きは、最近四、五年間に、殊に獨逸の學界に於て盛んに論争されて來たイデオロギーとウトビー問題であると思ふ。そうして京都帝國大學圖書館や、又私自身の購入せる獨逸の著書雜誌に就て探求するも、此の問題の論争に關する文献は既になりの數に達して居るが、尙ほ昨年末に刊行されたフイアカント編輯の「社會學辭典」¹⁾第四冊に於けるマンハイムの「知識社會學」の文献によると、其の外にも幾多の著書、論文が見出される。そうして最近に此の問題が盛んに論争されて來たことは、マルクス主義の勃興に伴ない、之れに對する學界一般の眞剣な批判的考察が大に發達して來たことに基因するのは云ふまでもないが、更に深く探究して行くと、夫れはつまり現今の歐洲諸國民の社會的經濟的狀態が、社會改造問題、結局は現代的社會理念の確立問題に對する一般人心の要求を、大に強烈ならしめ、そうして種々具體的な社會理念が提唱されるに當つて、之を批判的に評

1) Handwörterbuch der Soziologie, 1931.

價する爲めに、先づ社會理念一般の論理的本質を究明することが必要であると云ふ考へが、學者間に一般に勃興して來たことに基因するかと思はれる。しかも此の問題の論争は、直接にはマルクス主義のイデオロギー論 Ideologienlehre に結び附いて發達せるものであるから、今日此の問題の論争を批判的に考察せんとするに當つて、吾人の先づ注目すべきはマルクス及びエンゲルスのイデオロギー論であらねばならぬ。それで私も此處に先づマルクス及びエンゲルスのイデオロギー論から考察し始めたいと思ふのであるが、尙ほ夫れに先だちイデオロギー概念の由來や、夫れの幾多の意味に就て簡單に論じて置く。

三、イデオロギー概念の由來

前節に述べし如く、イデオロギーとウトビー問題が、殊に最近四、五年間に盛んに論争されるに至つた直接の動機は、マルクス主義のイデオロギー論の批判から生ぜるものであるが、更に近頃の思想界に於て、イデオロギーと云ふ言葉が一般に用ひられるに至つたのも、直接にはマルクス主義の普及と、同主義が一般に大に重要視されて來たことに基因すると思はれる。そうしてマルクス主義の用ひるが如き意味では、イデオロギー概念は現實的には確かに同主義の創說せるものであるが、併しイデオロギーと云ふ言葉其物はマルクスの新たに鑄造せるものでなく、彼れ以前に既に鑄造されて居たもので、そうして始めには彼の用ひたのとは大に異なる意味に用ひ

られ、又其の後は彼の用ひた意味の一方面と一般的には同様な意味にも用ひられて居た。尙ほ第十九世紀の終り頃には、此の語の原義とも、亦マルクスの與へたのとも、亦今日用ひられて來た新しき意味とも異なる意味にて、學問論上大に重要視して此の語を用ひた人々もあつた。そうして此等の歴史的事實を知つて置くことは、今日イデオロギー問題を論究するに當つて有益であると考えらるから、此處に先づ簡単に述べて置きたいと思ふ。

岩波哲學小辭典¹⁾には「觀念學」(Ideology, Ideologie, Ideologik)に就て左の如く言述されて居る。「フランスに於て十八世紀に起つた感覺論が革命時代及び其の直後の時代に於て繼承發展された一種の哲學、形而上學を排斥し、哲學を人性論、心理學に歸して觀念の分析、其起原及び成立の探究に限り、此の見地から倫理學、教育學、政治學等を改造し、之等に合理的基礎を與へんと努むるもの、此の學の名を最初に與へたのはデステュット・ド・トラシ」。

併し右の説明は只通俗的な辭典に於て、以前から一般に述べられて居るぐらひの事を教へるに止まり、千九百三十年に公にされた哲學辭典の與へる説明としては、不充分であるかと思はれる。人々は同辭典によりては、今日マルクス主義者が盛んに用ひて居る同語の意味も、亦今日汎く用ひられて居る意味も、亦近來哲學上、社會學上用ひられて來た意味も學ぶことが出来ない。アイスラーの哲學辭典第二版²⁾も、岩波小辭典に述べられて居ることの外に、只マルクスの用ひた意味の一面を極簡単に述べて居るだけである。併し同辭典同版は千九百二十二年に公にされたのであるから恕す可き點がある。是れイデオロギーが盛んに論議され、又新しき意味にも用ひられて來たのは、其の後の事であるからである。尙ほ此處に注意して置きたいことは、アイスラーの辭典や、「デア、グロセ、ブロックハウス」に於て述べられて居るマルクスのイデオロギー概念の意味の一方面は、今日マルクス派のイデオロギー論として重要視されて居る意味の方面ではないことである。詳しくは後に述べる。

今日イデオロギーと云ふ語はデチュト・ヅ・ツラシ (Destutt de Tracy) の發明せるものにして、彼は千七百九十六年の九月及び十月に、國民學藝院 (L'Institut National des Sciences et des Arts)

1) 岩波哲學小辭典、昭和五年出版。

2) Meyers Grosses Konversations-Lexikon, 6. Auflage, 9. Band, 1906.

3) Eisler, Handwörterbuch der Philosophie, Zweite Auflage, 1922, 但し通俗辭典でも1931年版の Der Grosse Brockhaus, 9. Band には佛蘭西イデオロギストの用ひた意味と、ナポレオンの意味と、マルクス主義の用ひる意味の一方面との三つの意味が説述されて居る。

に於て思想の分析、或は寧ろ思惟する能力、或は知覺する能力に關する二つの論文を朗讀したが、¹⁾其の中に、此の分析より生ずる學は舊形而上學から區別される爲めに、よろしく *idéologie* 卽ち觀念の學と稱せらる可きものなるを主張したのである。そうして夫れよりコンデイリヤクの學說を繼承して、更に彼れ以上に種々の方針に之を發展させたツ・ツラシ及びカバニス一派の人々は、彼等の哲學をイデオロギーと稱し、又彼等自身を *idéologues* (*idéologues* でない) と稱した。¹⁾ 然らばツ・ツラシは彼の新たに發明せるイデオロヂーと云ふ語によりて、如何なる學問を表示せんとしたか。卽ち彼のイデオロギーの概念は、嚴密に云へば如何なるものであつたか。此の問題を論究する爲めには、彼が彼のイデオロヂーを組織的に詳しく論述せる「イデオロヂー要義」四卷、殊に同書第一卷「嚴密に云ふイデオロヂー」を參考することが、最良の方法であると思ふ。

ツ・ツラシの「イデオロヂー要義」第一卷は「嚴密に云ふイデオロヂー」と題され、彼のイデオロヂーの基本原理解を論述するもの、第二卷は文法論、第三卷は論理學、第四卷は意志及び夫れの結果を論述するものである。

ツ・ツラシは「イデオロヂー要義」第一部(第一卷)の緒言中に、先づイデオロギーは動物學或は生理學の一部分であることを述べて、カバニスの生理學的イデオロヂーの重要を指示し、次にコンデイリヤクは眞に斯學の創設者であるが、完全に之を論述して居ないから、彼自身が今之を試みんとするものなるを述べ、終りに此第一部は只觀念の形成、卽ち嚴密に云ふイデオロヂーを論究するだけで、觀念の表現卽ち文法論、及び觀念の演繹卽ち論理學は、此の第一部に對する識者の

1) Picavet, Les Idéologues. Essai sur l'histoire des idées et des théories scientifiques, philosophiques, religieuses, etc. en France depuis 1789, 1891.

示教を仰ぎ、修正す可き點あらば、之を修正した後に公にしたいと思ふ旨を述べて居る。

ヅ・ツランは「イデオロヂー要義」第一部緒言の中に、右の如く述べて居るが、更に同部の序論の中に、斯學に對して如何なる名稱を與ふ可きは、是より論述を進めて行き、讀者が斯學の本質及び意義をよく理解するに至らば、明かに覺られるであらうと述べ、そうして其の附註に於て左の如く述べて居る。

「斯學は吾人若し只其の主題にのみ注目するならばイデオロヂーと稱し得られ、吾人若し只其の手段にのみ注意するならば文法論、そうして吾人若し只其の目的のみを考へるならば論理學と稱し得られる。如何なる名稱を斯學に與へるとも、斯學は必然的に右の三部分を包含するものである。と云ふのは吾人は其の何れの一部分をも、他の二部分を論究することなしには、正當に論究し得ないからである。併しイデオロヂーは一般的な名辭であると思はれる。是れ觀念の學は觀念の表現の學及び觀念の演繹の學を包含するからである。同時に此の言葉は第一部の特殊的名稱である。(p. xi)」

今以上述べし處によりに見れば、イデオロヂーと云ふ語を發明したヅ・ツランは、此の語を廣狹二義に用ひて居たことが學ばれる。そうして狹義即ち嚴密に云ふ意味に於ては、彼のイデオロヂーと云ふは思想の分析、或は觀念の形成、或は思惟する能力の學を意味するものにして、かくて彼が「イデオロヂー要義」第一部、「嚴密に云ふイデオロヂー」に於て論究して居るのは、左の諸問題である。

- (1) 思惟するとは何ぞや、(2) 感受性及び感覺に就て、(3) 記憶及び記念に就て、(4) 判斷及び關係の感覺に就て、(5)、意志及び慾望の感覺に就て、(6) 吾人の複合的觀念の形成に就て、(7) 存在に就て、(8) 吾人の知的諸能力は如何にして作用し始めるか、(9) 物體の諸性質及び夫れの關係に就て、(10) 物質の諸性質の測定に就て、(11) 上述の事項及びコンデイリヤクが思想を分析せる

2) Destutt de Tracy, *Éléments d'Idéologie*. 1^{re} partie. 1804. 3^e édition, 1817.
2^e partie, 1804. Seconde édition, 1817. 3^e partie, 1805. 4^e et 5^e partie, 1815. (京都帝國大學圖書館所藏)

仕方⁽¹²⁾に就ての省察、(12)吾人を動かす能力、及び夫れと感覺する能力との關係に就て、(13)吾人の意志する能力が、吾人を動かす能力及び思惟する能力の構成される諸能力の各々の上に及ぼす影響に就て、(14)同じ作用が屢々反復することが、吾人に於て生ずる結果に就て、(15)吾人の知的諸能力の漸次的完成に就て、(16)吾人の觀念の記號及び其の根本的結果に就て、(17)記號の他の諸結果に就て。

ヅ・ツラシは狹義に於てはイデオロヂーを右に述べしが如き學と解したが、併し廣義に於ては、夫れは狹義のイデオロヂーを含み、之を基礎として建設される文法學、論理學、倫理學、政治學、法律學、教育學、經濟學、其他、今日文化科學とか精神科學とか總稱される總ての學を包括するものと、解したのである。

却説イデオロヂーと云ふ語を發明して、之を舊形而上學から區別さる可き新しき哲學の名稱としたヅ・ツラシ一派の哲學者が、盛んに主唱したイデオロヂーの最初の學問論的概念は、大體上是れまでに述べしが如きものであるが、然るに其等の哲學者は第十八世紀の革命哲學の根本思想を固持し、オポレオンが大に勢力を振ふに至つて彼の帝王主義を排斥したが爲めに、ナポレオンは彼等を嫌忌し又侮蔑して、彼等をイデオログ (idéologues) と稱した。夫れはつまり現實を離れ、實際と沒交渉な空理空論を唱へるもの、リットレの佛蘭西語辭典¹⁾にイデオログの第二の意味として擧げられて居る「哲學的及び政治的夢想家」を意味するものである。そうして夫より彼等は一般に侮蔑の意味にてイデオログと稱せられ、又彼等の哲學としてイデオロヂーは侮蔑の意味を含む語となつたのである。

1) Littré, Dictionnaire de la Langue Française, Tome Troisième, 1873.

パールトは彼が一方的或は偏局的歴史觀と稱するものを、個人主義的及び集團主義的歴史觀、人類地理學的歴史觀、民族的歴史觀、文化史的歴史觀、政治的歴史觀、經濟的歴史觀、イデオロギー的歴史觀等に分類して居るが、此の際彼がイデオロギー的歴史觀と稱して居るのは、要するに歴史は宗教的及び哲學的世界觀によりて支配されて居ると見る見地、歴史は民族の理念によりて支配されて居ると見る見地、歴史は倫理的進歩によりて支配されて居ると見地等を包括するものである。

イデオロギーと云ふ語は、右へ述べしが如きパールトが用ひたのと同様な意味にても、今日廣く用ひられて居ると思はれるが、尙ほ社會學者中には學問の體統上、社會學の上に更に一の新しき學問を建設せんとし、之をイデオロギー(理想學或は理念學)と稱せんとする人があつた。夫れはアドルフ・コストである¹⁾。

コストは一般に廣く社會現象と稱せられて居るものを、根本的に二大部類に分ち、其の一は國民的性格を有し、集團から産出されるものにして、嚴密に社會現象と稱せらる可きもの、其の二は世界的性格を有し、天才から産出されるものにして、社會現象から區別して超社會的現象或は理想的(理念的)現象と稱せらる可きものであると認め、そうして嚴密に社會的現象と稱せらる可きものを對象とする科學が、社會學と稱せられるのに對して、理念的或は超社會的現象と稱せらる可きものを對象とする科學は、イデオロギーと稱せらる可きであると考へたのである。

私は早くから右のコストの社會的現象と理念的或は理想的現象との區別は、社會學上種々なる意味にて重要な意義を有するものと認め、殊に之をウントの立てた民族心理現象と歴史現象との區別と比較對照して、其の類差を辨別することは、社會學の對象としての社會的現實態の概念を嚴密に規定する爲めに、甚だ肝要であると考へ、私の京都帝國大學に於ける社會學概論の講義中屢々論述して居たのであるが、近頃獨逸に於てアルフレート・ウェバーが唱へ出した文化社會學 Kultursoziologie に於て、彼が創設したと稱する社會過程と文明過程と文化運動との區別は、社會學史上から見れば、つまりコストの區別を更に詳しく展開せるものに外ならぬと考へて、四、五年前の京都帝國大學經濟學部の社會學概論講義中にかなり詳しく論評して置いた。併しまだ外部には發表して居ないが、然るに近頃獨逸留學中の社會學者の通信によれば、ハイデルベルク大學

1) Adolph Coste, Les principes d'une sociologie objective, 1890. L'Experience des peuples et les previsions qu'elle autorise, 1900.

2) Wilhelm Wundt, Völkerpsychologie, I, 1, 1900. Elemente der Völkerpsychologie, 1912.

拙稿ウントの民族社會學と余輩の社會學、心理研究、大正二年一月及び二月號。

に於てはアルフレート・ウェバーの文化社會學は大なる人氣を得、又勢力を振ふて居るとの事であるから、他日改めて彼の文化社會學を批判したいと思ふ。¹⁾ 尙ほ上にあげしコストの區別は、後に述べるマルクスの法律的及び政治的上構と社會的意識諸形態との區別や、更にヘーゲルの客觀的精神と絶對的精神との區別²⁾や、メーリスが歴史哲學に於て立てた客觀的文化價值と絶對的文化價值との區別等と比較對照して考察することは大に有益であると思はれる。

四、マルクス及びエンゲルスのイデオロギー論

さきに述べし如く、今日イデオロギーの概念を考究せんとするに當つて、吾人の先づ注目すべきはマルクス及びエンゲルスのイデオロギー論である。然るにマルクス及びエンゲルスのイデオロギー論は、社會學的又社會哲學的に見れば、歴史的唯物論或は唯物史觀の中心的部分であるとも認めらる可きものにして、かくて之を深く論究する爲めには、唯物史觀の全體を考案せねばならないが、此處に其の暇はないから、只彼等のイデオロギー概念を一般的に究明する爲めに必要な限りに於て、唯物史觀の一般の意味を簡單に論述するだけに止めざるを得ない。

今私の見る處によれば、マルクス及びエンゲルスはイデオロギーの概念を二種の意味に用ひて居たと思はれる。又今日のマルクス主義者もヤハリ同様な二種の意味に之を解して居ると思はれる。私は此處で便宜上其の一を純理論の意味、其の二を實際的或は政治論の意味と稱して置く。但しザロモン⁴⁾も私とは少し異なる意味に於てであるが、矢張りマルクス及びエンゲルスのイデオロギー概念の二重意味を説いて居る。先づ其の純理論の意味を考究する。

- 1) Alfred Weber, Prinzipielles zur Kultursociologie, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 1920-1921. Ideen zur Staats- und Kultursociologie, 1927. Kultursociologie, Handwörterbuch der Soziologie, 1931.
- 2) Hegel, Encyclopädie der Philosophischen Wissenschaften im Grundrisse, Dritter Teil.
- 3) Mehlis, Lehrbuch der Geschichtsphilosophie, 1915.
- 4) Salomon, Historischer Materialismus und Ideologienlehre, Jahrbuch für Soziologie, II. Band, 1926.

マルクスのイデオロギー概念の純理論的意味を考究するには、先づ彼の「經濟學の批判に就て」の緒言中に見出される有名なる左の言述に、注目することが便宜であると思ふ。

「人間は夫れの生活の社會的生產に於て、一定の、必然的な、人間の意志から獨立せる諸關係、即ち人間の物質的生產諸力の一定の發達階段に相應する生產諸關係に入り込む。此等の生產諸關係の總體が社會の經濟的構造、即ち夫れの上に一の法律的及び政治的上構が聳へ立ち、又夫れに一定の社會的意識諸形態が相應する現實的基礎を造る。物質的生活の生産様式は社會的、政治的及び精神的的生活過程一般を制約 (bedingend) する。人間の意識が人間の存在を規定 (bestimmend) するのでなく、逆に人間の社會的存在が意識を規定する。社會の物質的生產諸力は夫れの發達の一定の階段に於て、現存する生產諸關係、或は其等の關係に對する一の法律的表現であるもの、即ち夫れが是れまで其の中に動いて居た財產諸關係と矛盾に陷る。かくて此等の諸關係は生產諸力の發達諸形式から生產諸力の桎梏に轉化する。其の時社會的革命的の一時代が始まる。經濟的基礎の變動と共に廣大なる上構全體が、より除々に又はより急速に變革する。そうしてかゝる變革の考察に於ては、吾人は經濟的生產條件に於ける物質的な、自然科學的に誠實に叙述さる可き變革と、法律的、政治的、宗教的、藝術的或は哲學的諸形態、約言すればイデオロギー的諸形態 (其等の諸形態に於て人々は此の衝突を意識し、又之を闘争によりて決着づける) とを、常に區別せねばならぬ。吾人は個人が已れ自から已れを如何に考へて居るかによりて個人を判定しないと同じく、かゝる變革時代を夫れの意識から判定することが出来ない。そうして寧ろ此の意識を物質的生活の矛盾、即ち社會的生產諸力と生產諸關係との間に現在する衝突から説明せねばならぬ。何れの社會構成も、夫れが充分に適當する一切の生產諸力が發達して仕舞ふ前には、決して没落しない。又新しきより高き生產諸關係は、夫れの物質的存在諸條件が舊社會其物の胎内に於て孵化される前には、決して現はれない。されば人類は常に只解決し得る課題のみを呈出するのである。一層詳しく考察すれば、實に課題なるものは只夫れの解決の物質的諸條件が既に現存するか、又は少なくとも夫れの生成の過程中に入り込んで居る處にのみ生起することが、常に見出されるであらう。大體上から見れば、亞細亞的、古代的、封建的及び近世有產者的生產諸様式は、經濟的社會形成の進歩的諸時代として表示され得る。有產者的生產諸關係は、社會的生產過程の最後の反對的形式である。(此處に反對的と云ふは個人的反對を意味するのでなく、個人の社會的生活諸條件から生長する反對を意味するのである。) 併し有產者的社會の胎内に發達する生產諸力は、同時に此の反對の解除の物質的諸條件

を造る。かくて此の社會形成は人間社會の歴史を終結するのである。¹⁾

右に掲げしマルクスの言述は、一見すれば其の意味明瞭であるが如くに思はれて、しかも詳しく批判的に吟味して行くと、其の意味が甚だ曖昧なる個所の少なくないことが發見されるので、かくて右の言述の嚴密精確なる意味に關しては、啻にマルクス主義者とマルクス批判家との間に其の解釋の差異が發見されるのみならず、更にマルクス批判家同士の間にも、否なマルクス主義者同士の間にも、其の解釋が種々相異なつて居ることが發見されるのである。されば右のマルクスの言述、隨ふて彼の歴史的唯物論、或は唯物史觀の精確なる眞義を理解することは甚だ困難であるので、そうして夫れが爲めには吾人は其等種々なる解釋を參考しつつ、改めてマルクス及エンゲルスの著作全體を詳しく研究せねばならないのである。併し私は此處でかかる研究を試みんとするのではなく、只マルクス及びエンゲルスのイデオロギー概念の純理論的意味を簡単に論述せんとするだけであるから、隨ふて只夫れが爲めに直接當面に必要である限りに於て、右のマルクスの言述を考察するに止めて置きたいと思ふ。

今右の言述中にマルクスが用ひて居る物質的生産諸力、生産諸關係、生産諸様式、社會の經濟的構造等の諸概念の精確なる意味に關しては、マルクス批判家の間にも、亦マルクス主義者の間にも種々解釋が異なつて居るので、一時盛んに論争され、又今日も此の論争はまだ終決して居ないが、此處では此の論争に就て論述する暇はない。²⁾ 併し其等の諸概念の精確なる意味は如何に決

1) Karl Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie (1859). Herausgegeben von Karl Kautsky, 1924.

2) 此の論争の一般は左の諸著作によつて學び得られる。
Masaryk, Die Philosophischen und Soziologischen Grundlagen des Marxismus, 1899.
Barth, Die Philosophie der Geschichte als Soziologie, 1897. Dritte und

定さる可きものであるにせよ、とにかくマルクスは社會の經濟的構造を以て、社會の現實的基礎或は土臺と認め、そうして其の他の一切の社會現象、即ち法律、政治、宗教、藝術、哲學等々は經濟的構造の上に築き上げられ、又は之れに相應して發達するもの、即ち社會の上構であると考へて居たと云ふことは疑はれない。併し此の思想に就ても亦幾多の重大なる問題が起つてくる。即ちマルクスは、彼が社會の現實的基礎と見る經濟的構造と、社會の上構と見る法律、政治、宗教、藝術、哲學等との關係或は結び附きの論理的性質を如何に解したかと云ふ問題、彼は其の關係或は結び附きを如何に説明せんとしたかと云ふ問題、彼は社會の上構として包括する社會現象の一切の部類を總てイデオロギーと見たのであるか、又は只其の中の一定の部類だけをイデオロギーと見たのであるかと云ふ問題、彼は社會の上構と總稱する社會現象の諸部類は、總て直接に同等に經濟的構造によりて規定或は制約されると考へたか、又は其等の社會現象中の或部類は他の部類を通じて、間接に規定或は制約されると考へたかと云ふ問題、彼は其等の社會現象の諸部類の相互の關係を如何に考へたかと云ふ問題、其等の社會現象の諸部類が經濟的構造の上に及ぼす反動作用を如何に考へたかと云ふ問題等の諸問題が起つてくる。そうして其等の諸問題を批判的に考究することは、マルクス及びエンゲルスのイデオロギーの概念を精確に決定する爲めに肝要であるが、併し此處ではとても其等の諸問題に就て一々論究することは出来ないから、只其中で彼等のイデオロギー概念の一般を了解する爲めに、直接に特に必要なる問題、即ち彼等は社

會の上構と總稱する社會現象の總ての部類をイデオロギーと見たか、又は只其の中の一定の部類だけをイデオロギーと見たかと云ふ問題を考究するだけに止める¹⁾。

今上に舉げしマルクスの言述に就て、此處に問題とする點から見て注目す可きは、マルクスは先づ、社會の現實的基礎としての社會の經濟的構造の上に法律的及び政治的上構が聳へ立ち、又社會の經濟的構造に一定の社會的意識諸形態が相應して居ると云ふて居ることである。是れによりて考へると、マルクスは社會の上構を法律的及び政治的上構と社會的意識諸形態とに大別し、そうして特に彼が社會的意識諸形態と稱するもののみを、イデオロギーと見たと推察されるのである。尙ほ彼はすぐ次に、物質的生活の生産様式は社會的、政治的及び精神的生活過程一般を制約すると云ふて居るが、是れも特に精神的生活だけをイデオロギーと稱するものと解することが出来る。然るに少しく後には、彼は「法律的、政治的、宗教的、藝術的、或は哲學的諸形態、約言すればイデオロギー的諸形態云々」と述べて居るので、此の言によれば、彼がイデオロギーと云ふは、つまり社會的上構全體を意味するものと解せねばならぬ。

エンゲルスも「反デュリッゲン論」²⁾序論の中に、社會の經濟的構造は現實なる土臺にして、「各時代に於ける法律的及び政治的秩序、并に哲學的、宗教的、其の他の表象仕方の全上構云々」と云ふて居るので、其の言によれば彼は只純意識諸形態のみをイデオロギーと稱するものと解される。尙ほ彼は「ルドウイヒ、フォイエルバッハと古典的獨逸哲學の終末」³⁾に於て、イデオロギーとは、つまり「獨立的な、他に依存せずして發達し、只夫れ自身の法則にのみ従ふ存在として、思想を取扱ふこと」を意味するものと述べて居るが、此の言もつまりは只純意識諸形態にのみ適用されるものと思はれる。併し彼は又同書に於て

- 1) 右に列擧せる諸問題に關する論究も、さきに擧げたる Masarysk, Barth, Hiammacher, Bucharin, Cunow, Kautzky 等の諸著作によりて學ぶことが出来るが、詳しく研究する爲めには尙ほ參考す可き多數の著作がある。但し世界大戰開始後の文献の詳しく目錄は Marx-Engels Archiv に載せられて居る。
- 2) Engels, Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft, 1878. 12. Auflage, 1923, S. 12.
- 3) Engels, Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie, 1888, 4. Auflage, 1907, S. 52-53.

「國家に於て人間に對する最初のイデオロギー的力が表現する」と云ひ、更に「國家は一度社會に對する一の獨立なる力となつた上は、直ちにより廣大なるイデオロギーを産出する」と述べて居るから、社會の上構全體をもイデオロギーと考へたことは明白である。

以上述べし處によりて考へると、マルクス及びエンゲルスは、純理論的意味に於ても、更にイデオロギーの概念を廣狹二義に用ひ、廣義に於ては、法律、政治、宗教、哲學、藝術等の全上構を意味し、狹義に於ては只宗教、哲學、藝術等の社會的意識諸形態、或は純意識諸形態のみを意味したと解するのが正當であると思はれる。

テーンニスは既に千八百九十四年に公にせる論文に於てマルクスの社會現象の分類に二種あるを論じ、其の一は經濟的構造と法律的及び政治的上構と、社會的意識諸形態とを區別する三分法にして、其の二は物質的生活の生産様式、即ち社會的存在と社會的、政治的及び精神的生活動程とを區別する二分法であると述べ、以てマルクスのイデオロギー概念に廣狹二義あるを暗示して居る。然るにバールトはマルクスの社會現象の分類に關するテーンニスの右の解釋に直ちに反對して、左の如くに論じて居る。即ち「マルクスは社會現象を三部類に分つが如く見ゆる言述に於ても、社會的意識諸形態は法律的及び政治的上構と一列に排置されて居るので、決して夫れと異なる一部類として區別されて居るのではない。そうしてマルクスにありては、一切の上構が經濟に依存すると云ふことが肝要であるので、其の依存の仕方や度合の大小と云ふことはあまり重要でない。隨ふて彼は其の仕方や度合の大小に應じて社會の上構を位階的順序に於て、一定の部類に分類せんとしたのでない。只社會現象を二分するが如く見ゆる言述に於ては、之を三分するが如く見ゆる言述に於て社會的意識諸形態と稱せられて居るものが、社會的生活動程と精神的生活動程とに分けて考へられて居るだけであつて、そうして其の際には政治的生活動程は、三分法を説くが如く見へる場合に於ける政治的上構に對應し、更に法律的上構を包括するものである」³⁾併しハムマーヒヤーはテーンニスの解釋も亦バールトの解釋も共に正鵠を得て居ないとして、鋭い批判を加へて居るが、結局は彼もマルクス及びエンゲルスのイデオロギー概念には廣狹二義あることは承認し、「狹い意味に於ては、エンゲルスはイデオロギーを獨立な、他に依存せずして發達し、只夫れ自身の法則にのみ従ふ存在として、思想を取扱ふことと定義して居る。そうし

- 1) Engels, a. a. O. S. 51.
- 2) Tönnies, Neuere Philosophie der Geschichte; Hegel, Marx, Comte. Archiv für Geschichte der Philosophie, 1894.
- 3) Paul Barth, Zur Hegels und Marx' Geschichtsphilosophie. Archiv für Geschichte der Philosophie, 1895.

て經驗主義的論辨に適合する此の規定は、明かに只純粹なる意識諸形態にのみ妥當する。併しエンゲルスは國家をも亦イデオロギーの力と稱して居るのであるから、かくてイデオロギーは上構全體及び階級闘争と完全に同一化されて居る。¹⁾と論じて居る。

尙ほマルクス及びエンゲルスのイデオロギー概念を詳しく究明する爲めには、更に論じなければならぬ幾多の問題があるが、此處では其の暇がないから、只以上述べし如くに彼等のイデオロギー概念は、私が其の純理論的意味と稱する方面に於ても、廣狹二義を有することを明かにするだけに止める。

但し今日のマルクス主義學者間には、現代社會學の方針に従ふて、マルクス及びエンゲルス以上に精確に、社會の上構及びイデオロギーの概念を規定せんとする人々があるので、そうして夫れは現代社會學者も注意すべき點であると思はれるから、此處に其の一例としてブハリンの見解を擧げて置く。ブハリンは彼の「歴史的唯物論」の中に、先づ社會の上構の概念を規定して、夫れは「經濟的基礎の上に築き上げられたる社會現象の何れの類型をも意味する」ものにして、例へば「社會的心理、一切の物質的部分を具備する社會的、政治的秩序、人間の編制、并に言語及び思想の如き諸現象を包括するであらう」と述べ、次に社會的イデオロギーと云ふ語は「思想、感情、或は行爲の規則(規範)の體系を意味し」かくて「科學及び藝術の内容、規範、慣習、道德等々の總體の如き諸現象を包括するであらう」と述べ、終りに社會的イデオロギーから社會的心理を區別し、そうして社會的心理とは「與へられたる社會、階級、團體、職業等々の中に見出される處の、組織されない、或は僅かに組織されて居るに過ぎない諸感情、諸思想及び諸氣分等を意味する」と述べ、そうして社會的イデオロギーと社會的心理との區別に就て詳しく論述して居る。²⁾

私がマルクス及びエンゲルスのイデオロギー概念の純理論的意味と稱するものは、大體に於て以上述べしが如きものであるが、夫れによりて考ふれば、純理論的意味に於ては、マルクス及び

1) Emil Hammacher, Das Philosophisch-Ökonomische System des Marxismus, 1908, S. 190-193.

2) Bucharin, Theorie des historischen Materialismus, 1922.

エンゲルスがイデオロギーと稱するものは、一定の經濟的構造を現實的基礎となし、夫れによりて制約され、又は規定されて、夫れの上に自然的必然的に發達する社會現象の全體、又は一定の諸部類を意味するものにして、そうしてかかる純理論的意味に於ては、彼等はイデオロギーの概念に何等の非難又は侮蔑を加へる意味を含ませて居ないのである。然るにマルクス及びエンゲルスは又かかる意味とは本質的な連絡を有するが、しかも主としてナポレオンの意味にイデオロギーと云ふ語を用ひて居る。即ち反對の學說或は政治論を現實に即しない空理空論、或は夢想妄想として排斥し、之を非難し、侮蔑する意味に用ひて居る。是れ私が彼等のイデオロギー概念の實際的或は政治論的意味と稱するものにして、そして今日一般にマルクスのイデオロギー論と稱せられて居るものは、かかる意味にイデオロギー概念を解するものであると思はれる。

今マルクス及びエンゲルスのイデオロギー概念の實際的或は政治論的意味を詳しく考究せんとするには、マルクス及びエンゲルスの多くの著作を調らべて見なければならぬが、此處では其の暇がないから、近來リヤザノヴによりて公にされた「デイ・ドイチエ、イデオロギーの第一部」、「フオイエルバッハ論」¹⁾と其の著作が書き下されたと推察されて居る千八百四十五年に公にされた「神聖家族」²⁾とを調査して先づマルクス及びエンゲルスのイデオロギー概念の原本の意味を究明したいと思ふ。但し「神聖家族」は千八百四十五年に出版されて居るが、併し同書は其の前年、千八百四十四年中に書き上げ、印刷に附せられたものであるから、其の中には尙ほフオイエルバッハ

1) Marx und Engels über Feuerbach, Marx-Engels Archiv, I. Band, S. 205-306.
2) Engels und Marx, Die heilige Familie oder Kritik der kritischen Kritik, 1845. (京都帝國大學圖書館所藏)

の影響は強く現はれて居る。併し夫れと同時に又、其の中にはマルクス及びエンゲルスが「ドイツエ、イデオロギー」第一部に於て見られるが如くに、フオイエルバッハを乗り越へて行つた途行きが発見されるので、マルクスの唯物論及び唯物史觀の發生の研究上重要な文献である。

却説マルクス及びエンゲルスが哲學と云ふ場合には、一般にヘーゲル哲學を意味して居たので、又彼等が非難する意味にてイデオロギーと云ふ場合には、先づヘーゲルの哲學を意味して居たのである。そうして彼等が「ドイツエ、イデオロギー」と題する著書、第一卷は、つまりフオイエルバッハ、ブルーノ・パウエル及びシュタルナー等を代表者とするヘーゲル後のヘーゲル派哲學を批判せんとせるものであるから、本書に於てマルクス及びエンゲルスがイデオロギー達とか、吾等の獨逸イデオロギー達とか稱して居るのは、先づ其等の人々を意味するのであり、又イデオロギーと云ふは先づ其等の人々の哲學を意味して居るのであることが察知される。されば本書に於けるマルクスのイデオロギー概念は、彼等は先づ其等の人々を何故にイデオロギーと稱し、又其等の人々の哲學を何故にイデオロギーと稱したかを、考究することによりて究明されると思ふ。かくて私は本書に於て、マルクス及びエンゲルスがイデオロギーとかイデオロギーとか云ふ語を用ひて居る總ての個所を抜き出して之を比較し、其の一般的意味を把捉して見ようと努めたのであるが、詳しく述べる暇はないから、只其の一般的意味として把み得たと思ふものを簡單に述べるに止める。

今マルクス及びエンゲルスが本書に於て、イデオロギーと云ひイデオログと稱して居るものは、リヤザノヴが本書の緒言の草案と認めて公にせるものの中に、大體上明かに示されて居ると思はれる¹⁾。要するにマルクス及びエンゲルスが此處にイデオロギーと云ふは、つまり世界を觀念によりて支配されて居と考へ、觀念及び概念を規定的原理(最後の又最眞な形式)と認め、一定の思想を哲學者の近づき得る物質的世界の秘密と考へる觀念論的哲學にして、イデオログと云ふは觀念、表象、概念等が是れまで現實な人間、世界を支配し、又規定したと主張し、現實なる世界は觀念的世界の一產物であると主張する哲學者、全物質的世界を一の思想世界に、又全歴史を思想の歴史に轉化した哲學者である。そしてマルクス及びエンゲルスが、かかる意味に解するイデオロギー及びイデオログの概念に、非難する意味、侮蔑する意味を含ませたのは、つまり彼等の主張する唯物論の見方から考ふれば、まさしく其の逆が眞理であるからである。かくて彼等の見る處によれば、イデオロギーとは眞理を逆に考へる思想、イデオログとは總てのものを逆立ちさせる (alles auf den Kopf stellen) 人々である。

マルクス及びエンゲルスが「ドイチュエ、イデオロギー」に於て、イデオロギー及びイデオログと稱するものは、大體上右に述べしが如きものであるとすると、第三者から見れば、夫れはつまり、反對の學說を現實に卽しない空理空論、又反對の思想家を空想家、夢想家と見ることを意味するものである。併し、此處に一の問題が起つてくる。夫れは彼等がイデオロギー及びイデオロ

1) Marx-Engels Archiv, I. Band, S. 230-232.

ーグと云ふはつまりは右に述べしが如きものであるならば、何故に彼等は單に空理、空論とか、空想家、夢想家とか云はずして、特にイデオロギー及イデオログと云ふ語を用ひたかと云ふことである。

此の問題は一見すればさほど重要でないものの如くに思はれるが、併し此の問題をつとめて研究して行くと、近頃まであまり注意されて居なかつたマルクス研究の一方面、即ちマルクスの認識論的思想の方面に於て、吾人は重要な結論に導かれるかと思はれるので、私は此の問題はマルクス研究上重要な一問題であると考へるのである。近來まではマルクス批判家はマルクスをヘーゲルの一學徒として、或は少なくともマルクスの根本思想をヘーゲルの思想と密接に結び附けて研究するか、又はカントの思想に結び附けて研究して居たのであるが、然るに近來マルクの指摘せる如く、「マルクス主義に於ける辨證法の意識的認識論的基礎附けは、批判主義的でも亦ヘーゲルのでもなく、實證主義的及び素朴實在主義的である」ことが注目されるに至つて、マルクス主義の經驗主義的實證主義的方面が大に重視されて來た。そうして夫れによりて、マルクスの革命主義的根本思想と第十八世紀の佛蘭西革命の哲學との密接なる關係が注目され、更に經驗主義、感覺主義は當代を支配して居る傳來の諸規範及び諸形式の權威及び先天性を否定することによりて、歴史上一般に革命的に作用して居たことが覺られて、革命主義的なマルクスが早くから佛蘭西革命の經驗主義的、感覺主義的哲學に共鳴し、之を彼の思想の出發點としたことが了解される。然るに佛蘭西革命の經驗主義的、感覺主義的哲學として最も重要なものは、コンディリヤクを創設者と認めるイデオロギー派の哲學であつた。そうして同派の人々の幾多の著書がマルクスの父の書齋に所藏されて居たと思はれるから、マルクスは早くから佛蘭西イデオロギー派の思想に接して居たことが推察される。随つて彼は早くからイデオロギーとかイデオログとか云ふ佛蘭西語を知つて居たものと思はれる。尙ほ彼は第十八世紀の終り及び第十九世紀の始めに於て、イデオロギーと稱せられて大なる勢力を振つて居た「革命」の哲學の根本方針にして、又獨逸に於ては「啓蒙」の思想の根本方針であつた經驗主義及び實證主義を、如何に早くから重要視して居たかは、彼の千八百四十一年の學位論文の中にエピクルが大啓蒙家として讃稱されて居り、又「神聖家族」の中には、コンディリヤク一派の唯物論が直接に社會主義及び共產主義に達着するものとして重要視されて居ることによりて推察される。更に同書によりて考へると、マルクス及びエンゲルスは佛蘭西のイデオロギー派の人々が克服した第十七世紀の形而上學が、第十九世紀の思辨的獨逸哲學に於て凱旋的に

1) Barth, Die Geschichtsphilosophie Hegels und der Hegelianer bis auf Marx, 1890. Hammacher, Das Philosophisch-Ökonomische System des Marxismus, 1908. Plenge, Marx und Hegel, 1911. Helander, Marx und Hegel, 1921. Vogel, Hegels Gesellschaftsbegriff, 1925. Freyer, Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft, 1930.

(2) 拙著晩近社會思想の研究上卷 Max Adler, Marxistische Probleme, 1913.

復興されて居るから、其等の人々が行なへる第十七世紀の形而上學に對する闘争が、再び獨逸に於て行はねばならないと考へ、そうして此の闘争はやはり其等の人々が用ひたと同じ反神學的、反形而上學的手段を用ひねばならぬと考へたと思はれる。要するに佛蘭西のイデオロギーの手段を以て、獨逸の觀念論的哲學及び觀念論的宗教と戦はんとするのが、同書の重要な一方針であつたかと思はれる。

今右に述べし如く、マルクスは早くから佛蘭西のイデオロギー派の人々の著作に接し、又其の思想を重要視して居たとするならば、彼は何故にイデオロギーとかイデオログとか云ふ語を、非難或は侮蔑の意味を含ませて使用するに至つたのであるか。此處に最早詳しく述べる暇はないから、只要點だけを簡単に述べるに止める。夫れ佛蘭西の革命の哲學者、イデオログが全力を盡くして戦ふたのは、根本的には當代を支配せる神學(Theologie)及び神學的或は宗教的國家論及び社會論であつたが、マルクスの青年時代に於てブロイセンを支配して居たのは、大體上夫れと同一視する可き、世俗化された神學としての、或は新教と合理主義とを總合して、一の新スコラスチクに作り上げられたるものとしての、又國家と神とを並らべて遵奉する復古的政治學としてのヘーゲル體系であつた。そうしてヘーゲル左派の人々が、先づ攻撃したのは宗教或は神學であつたが、併しマルクス及びエンゲルスの考へる處によれば、夫等の人々は尙ほヘーゲルの哲學に囚へられて居て、やはり根本的には觀念或は理念を尊崇して居た。隨ふて其等の人々のなさんとする處は、つまり一の或は新しき觀念(或は理念)を以て、他の或は古き觀念(或は理念)を排斥せんとするものに外ならない。マルクスが「ドイツエ、イデオロギー」第一部「フオイエルバッツ

- 3) Marck, Hegelianismus und Marxismus, 1922.
- 4) Salomon, Historischer Materialismus und Ideologienlehre. 1926. Liebert, Materialistische Geschichtsphilosophie, Handwörterbuch der Soziologie, 1931.
- 5) Szende, Verhüllung und Enthüllung, 1922. (私は此の書をまだ手に入れて居ないが、右に述べし意味にて此の書は諸書に引用されて居る。)

ハ論」の緒言中に述べて居る如く、其等の人々は人間は何であるか、又は何である可きかに就て、人間が是れまで常に作つて居た誤れる表象、空想を、人間の本質に相應する思想と取り換へることを教へようとか、かかる空想に對して批判的態度をとることを教へようとか、かかる空想を頭から叩き出すことを教へようとか、罪のない小供らしい空想を抱く人々に外ならなかつた。併し根本的な問題は當代を支配する觀念或は理念を、他の觀念或は理念と取り換へることでも、他の觀念或は理念によりて批判することでも、頭から叩き出すことでもなく、實に觀念或は理念が人間を規定し、支配すると云ふ考へ其物を克服することである。要するにヘーゲルは神(Theos)を基礎としてではなく、觀念(Idee)を基礎として彼の體系を建設して居るのであるから、第十八世紀の佛蘭西のイデオロギー論者が批評し、攻撃したのは神の學 Theologie であつたのに對して、當代に於て批評し攻撃す可きは觀念の學 Ideologie である可く、そうして此の批評及び攻撃は佛蘭西のイデオロギー論者が用ひたのと同じ手段、即ち經驗主義、感覺主義及び實證主義によりて行はる可きであると云ふのが、マルクス及びエンゲルスの最初の考へであつたと思はれる。かくて彼等は根本的には佛蘭西のイデオロギー論者の思想を繼承し發展させながら、しかもイデオロギーと云ふ語のイデーの概念を、佛蘭西のイデオロギー論者の云ふ意味でなく、ヘーゲルの云ふ意に解し、そうしてヘーゲルのイデーの學と云ふ意味に用ひて、之れに非難或は侮蔑の意を含ませるに至つたのであらうと思はれる。尙ほ夫れにはさきに述べしが如き、此の語のナポレ

6) Differenz der demokritischen und epikureischen Naturphilosophie, Marx-Engels Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Band I, Erster Habband, 1927.

7) Die heilige Familie, 1845, S. 196-211. (京都帝大國學圖書館所藏)

オンの用法が如何様にか影響を及ぼしたものと推察されるのである。

却説遅くとも既に千八百四十五年の秋までに、不完全ながら書き上げられて居たと云はれる「ドイチエ、イデオロギー」の、第一巻第一部と見做される「フィオルバッハ」論、及び同年に公にされた「神聖家族」によりて、私は私がマルクス及びエンゲルスのイデオロギー概念の實際的或は政治論的意味、又は彼等の實際的或は政治論的イデオロギー概念と稱せんとするものは、上に述べしが如くにして決定されるに至つたものと考えるのであるが、更に同概念は其の後特に如何なる意味にて、大に重要視して用ひられて來たかを考察する。併し最早詳しく論ずる暇はないから、只其の根本的方面を簡単に述べるに止める。要するに現代ブルジョア社會を支配する一切の觀念^{イデオロギー}は、現代の經濟的現實態に即せず、之れと背離する非現實的な幻想、妄想であると云ふのが其の後マルクス、エンゲルス及マルクス主義者が一般に大に重要視し來れる實際的或は政治論的イデオロギー概念の中核にして、かくて彼等にかかる一切の觀念は現代の經濟的現實態に即しない幻想、妄想であることを證明し、其の假面を剥ぎ、其の魔力を剝奪することが、即ちブルジョア、イデオロギーを批判することが、革命的活動を準備する主要手段であると確信して居る。彼等の考へる處によれば、現代資本主義的社會秩序は、最大のイデオロギー的時代、最とも深大なるイデオロギー的自己疎外或は自己隠匿の時代を作るものにして、そうしてブルジョア、イデオロギーはブルジョア階級が没落に近づくほど、ますます空言、幻想、意識的虚構となる。併しプロレ

タリアトは、此の如き形而上學的に戲翻されたる精神に囚はれて居ない。そうしてまさしく夫れが爲めに、かかる精神を歴史的なるもの、又歴史的に克服されたるものとして、其の假面を剥くことが出来る。かくてプロレタリアトは哲學を現實化することによりて、哲學を止揚するのである。そうして今イデオロギー論を右に述べし如くに解することが、即ち一般にマルクスのイデオロギー論 (die Marxsche Ideologie) の骨髓と認められてゐると思はれる。

終りにマルクス及びエンゲルスの純理論的イデオロギー概念と、實際的或は政治論的イデオロギー概念との連絡に就て、極簡単に述べて置く。今一見すれば、マルクス及びエンゲルスの純理論的イデオロギー概念と實際的或は政治的イデオロギー概念とは、大分相異なつて居るものの如く思はれるが、併し、吾人は其の間に本質的な連絡を觀破することが出来ると思ふ。さきに述べし如く、マルクス及びエンゲルスの純理論的イデオロギー概念は、廣狹二義を有するので、彼等は廣義に於ては社會的上構の全體をイデオロギーと稱して居るが、狹義に於ては、法律的及び政治的上構を除いて、只社會的意識諸形態のみをイデオロギーと稱して居るのである。然るに彼等は何故にかかゝる狹義のイデオロギー概念を構成したかと云ふに、要するに彼等の考へる處によれば、一切の社會的上構は均しく經濟的構造に依存するものであるが、併し其の依存の仕方、或は依存の度合、或は依存關係の遠近の度合が種々相異なつて居る。即ち法律的及び政治的上構は直接に、又はより多く、或はより近く經濟的構造に依存するが、宗教、藝術、哲學、倫理等の社

1) Freyer, Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft, 1930, S. 105-109. 參考

會的意識諸形態は間接に、又はより少なく、又はより遠く之れに依存して居る。かくてマルクスは上に挙げし「經濟學の批判」の緒言中に、法律的及び政治的上構は經濟的構造の上に聳へ立ち、社會的意識諸形態は經濟的構造に相應し、或は對應して居ると云ひ、又エンゲルスは、「ルドヴィヒ・フオイエルバッハと古典的獨逸哲學の終末」の中に、「更により高き、即ち更に物質的、經濟的基礎からより多く遠ざかれるイデオロギーは、哲學及び宗教の形態をとる¹⁾」と云ふて居るのである。そうして今物質的經濟的構造或は土臺に依存する仕方、殊にエンゲルスの云ふが如く、夫れから遠ざかる度合に應じて社會的上構が分類され、哲學、宗教、藝術等は法律的和政治的上構よりも經濟的構造から更により遠ざかれるものであるとすれば、彼等は物質的、經濟的構造或は土臺に接近すること大なる社會現象ほど、其の現實性より大なるものにして、之れに反して夫れから遠ざかるほど、其の現實性より小なるものと考へるのであるから、哲學、宗教、藝術等は法律的和政治的上構よりも現實性のより小なるものであらざるを得ない。かくて當代の物質的經濟的構造に相應する狹義のイデオロギーさへも、既に其の現實性は本來より小なるものであるとすれば、彼等が現代の物質的、經濟的基礎から大に離れて居り、又益々離れて行くと見る現代のブルジョア、イデオロギーの如きものは、殆んど現實性を有しないものとなるのである。そうして私は以上述べし如くに解釋することによりて、マルクス、エンゲルス及びマルクス主義者一般の純理論的イデオロギー概念と、實際的或は政治論的イデオロギー概念とは、本質的に相連絡して居るものと考へるのである。

1) Engels, Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie, 4. Auflage, 1907, S. 52.